ITP-EUROPA 派遣報告書

氏名：佐藤貴之
派遣先：ロシア国立人文大学大学院（モスクワ）
派遣期間：2011 年 9 月 9 日－2012 年 9 月 8 日

研究の概要：「ボリス・ピリニャークの芸術手法」

ボリス・ピリニャークは、L.トロツキーが命名した「革命の同伴者作家」と呼ばれる文学者集団をけん引していた、初期のソビエト文学を代表する作家である。革命後の文壇でピリニャークは頭角を現し、ロシア・モダニズムを代表するといっても過言ではない独特な創作手法が反響を呼び、「ピリニャーク主義」という用語が当時の文壇では流布するほど幅広い影響力を持っていた。ただし、日本のロシア文学研究ではピリニャークの存在は忘れ去られているのが現状である。こうした中、1920 年代から 30 年代のソビエト文学を新たな視点から照射していくうえで、ピリニャークの創作研究は重要な鍵を握っているといえよう。

研究の成果：

博士前期課程から現在に至るまで、ピリニャークの作品を創作過程の初期から中期にわたって考察、論文掲載と学会報告を通して研究成果の普及に努めてきた。今回の派遣期間では中期から後期を重点的に分析する形で作業を進めた。

モスクワへ渡航後まもなく、まずはロシア国内で執筆された博士論文の収集、検討に従事した。これらの博士論文はヒムキ市という、モスクワ市の隣町に位置する国立図書館で閲覧することができる。この図書館でピリニャーク創作に関する博士論文を収集し、検討、その作業をもとに論文「B.ピリニャークの創作における日本の表象――西と東の境界で――」（ロシア語）を執筆し、『上智ヨーロッパ研究』へ投稿した。論文は掲載済みである。派遣から 2011 年 11 月まではこれらの作業に専念した。

この論文を提出した後、ピリニャークと関係の深かった同時代の作家 A.プラトーノフとの比較研究に従事した。あまり日本では知られていないが、プラトーノフは 1920 年代末にピリニャークと一種の師弟関係にあり、『地方の間抜けども』（1928 年）や『中央黒土地帯』（1928 年）といった作品を共作の形で執筆している。そのほか、一部の研究では両作家間に見られる創作上の相互影響も指摘されており、ピリニャークやプラトーノフに関する一次資料、論集が次々と刊行される中、両作家の比較研究は時宜にかなったものといえよう。この観点から筆者が進めた研究の成果は次の学会、研究会で報告した。

1．第 13 回若手人文学者国際会議（2012 年 2 月、エストニア、ロシア語）タイトル：「A.プラトーノフと B.ピリニャークの共作問題に関する考察」

2．ロシア国立人文大学大学院研究会（2012 年 5 月、モスクワ、ロシア語）「A.プラトーノフと B.ピリニャークの創作における十月革命とスチヒーヤ」

このうち、一点目の論文に関しては現在、投稿先を検討中である。二点目の論文に関しては派遣先の『大学院紀要』に提出した。ただし、こちらの刊行物は依然出版準備中で、発行までは時間が必要と聞いている。

またロシアの博士課程では、外国語、哲学、専門（文学）からなる試験を受験することが求められている。そのうち、外国語と哲学は一年次で合格することが二年次へ進級する上で必要な条件となる。したがって、2012 年の 4 月から 6 月にかけては試験準備に奔走した。

外国語の試験は筆記、論文提出、研究会報告からなり、上記にあげた大学院研究会と『大学院紀要』への論文提出は試験の一部として組み込まれている。哲学の試験では研究ノートの提出と口頭試問に合格することが求められる。筆者は自らの専門に近い分野で作業を進め、「シュペングラーと 1920 年代のソヴィエト文学」を執筆し研究ノートとして提出した。口頭試問では 19 世紀ロシア哲学史に関する問題が出された。内容としてはスラヴ派の N.ダニレフスキー、西欧派の V.ソロヴィヨフの哲学体系に関してである。短い準備期間の中で膨大な量の作業を強いられたが、両試験とも 5 段階評価で「5」の成績で試験を通過することができた。

7 月はインターネット電話のスカイプを使用して、東京の会場で開催された日本スラヴ人文学会に参加した。筆者は「1920 年代のソヴィエト文学における西と東のパラダイム再興に関してーー探求、あるいは克服としてのスチヒーヤーー」というタイトルで研究報告を行った。この報告では、1920 年代における西欧文明志向とロシア文化志向という、二つの対立するベクトルの形成過程を思想家、文学者の創作をもとに分析した。学会の報告論文は今年度刊行される『スラヴィアーナ』に掲載される予定である。また 7 月は M.ブルガーコフの戯曲翻訳に従事した。共訳者としてはブルガーコフ研究者として知られる大森氏（東京大学）、秋月氏（スラヴ研究センター）がいる。戯曲集の刊行は 2012 年度末と聞いている。

8 月から帰国の 9 月上旬まではレーニン図書館で資料収集に専念した。この作業では十月革命前夜に発足した「スキタイ人」、「自由哲学協会」（ヴォリフィーラ）というサークルに関する資料収集を目的とした。対象とした人物は文学史家イワノフ＝ラズームニク、詩人の S.セーニンや N.クリューエフ、哲学者の E.ルンドベルグなどである。エセーニンは国民的詩人として現代でもたいへん評価が高いため、論集や伝記の類は次々と刊行されているが、その他の活動家らに関する資料は極度に乏しい。そのため、所蔵されている図書館となると、やはりレーニン図書館などの主要国立図書館に限られてくる。そのほか、博士論文で重要な位置を占める A.ブローク、ピリニャーク、プラトーノフに関する資料収集も幅広く行った。

今後の課題：

派遣先の研究機関では 2013 年 12 月に博士論文を提出することが求められている。それから約 9 ヶ月かけて論文の審査を行う形である。筆者の博士論文は三章立て構成されているが、指導教官のレクマーノフ教授、沼野教授と審議した結果、論文の第一章を 2012 年秋、第二章を 2013 年春、第三章を 2013 年秋という形で随時提出し審議する計画を立てた。今後はこの執筆計画を遂行できるよう尽力する次第である。

論文執筆とあわせて、2013 年の 6 月には試験「専門」を受験する必要がある。この試験はそれぞれの専門にあわせて出題されるが、筆者の場合は文学史と文学理論に関する問題が五門ずつ出題され、それに対し口頭で答えることになる。これとあわせて、筆者がこれまで執筆してきた論文を提出し、その審査も行われる。2011 年度派遣期間中に合格した外国語、哲学、さらに次回の試験「専門」すべてを合格して初めて博士論文を提出する資格が与えられる。したがって、この試験に合格することは 2012 年度に行うべき作業の中でも非常に重要な課題となってくる。

また今後は、VAK（ロシア連邦文部科学省付属高等諮問機関）が認定した学術誌への論文投稿を早急に進める必要がある。VAK が認定した雑誌は、日本の場合に置き換えると査読付きの学術誌にあたる。これらの学術誌に論文が掲載されていない場合、事前試験をすべてクリアしていても、最終審査に進むことはできない。非常に厳しいスケジュールとなるが、最終審査に間に合う形でこれらの論文執筆、掲載作業を進めていきたい。

最後になるが、今回の派遣に伴い、日ごろより御指導、御協力下さった ITP 委員会や国際交流係の皆様、ならびに指導教官の沼野恭子教授、オレグ・レクマーノフ教授には心から感謝の意を表したい。